

SE 中年記

目次

中年は失業によって東奔西走するのだ 8

毎日が海外旅行、台湾の会社に入社 13

採用通知 13

通訳がつくなんて 14

素晴らしい待遇 17

ああ、勘違い 19

ちよつと宣伝 20

方向オンチ 23

やることがない 26

新入社員はお気楽、極楽 28

社内メール 30

プロバイダ選び 33

日本人的発音 34

使い古したジョーク 36

指きりげんまん 38

二重人格 46

多重人格 51

引越し騒動 52

MACアドレス 60

困ったちゃんなひとたち 61

清水の舞台から 65

物流担当 67

在庫騒動 71

物流改善 80

ゴキブリ騒動 84

監査役平社員 86

果ては人事まで 87

編集も？	89
茶坊主な編集長	91
怒りの鉄拳	92
業務補助品	95
孫悟空	97
ただつこな元編集長	100
言葉の問題？	102
外注の管理術	103
シャレが通じない	106
二番煎じのジョーク	109
その他	110
日本語のわからない日本人 P A R T	111
日本語のわからない日本人 P A R T	114
歴史の重さ	116

ぬらりひょんな気分、コンピュータ通信の世界 118

通信の黎明期	118
パソコンを知らない S E	120
パソコン事始め	122
二〇〇〇年問題	124
サポートセンタ	131
在りし日のサポート	133
返事はどうする	135
ネットジャンキー	136
通信は地理に関係なく	138
通信は現実社会と一緒	140
パソコンの先には人間がいる	142
中年はラクをするのだ、人事担当から管理職への道	155
人事担当としての初仕事	155

採用条件	161
どっちもどっち	163
迷惑な台湾旅行	165
あたすい	167
活性化の極意	170
女性のアレ	174
出来ると使えるとの違い	176
酒呑み天国ニッポン	181
ちいママ	183
辛苦了	184
自称秘書	186
ボスの引っ越し	190
どっちがどっち	192
素人の発想	193
代筆	195
理不尽な叱責	196
風水	203
気・血・水	205
i ショップ	211
老いを感じたこと	213

中年は失業によって東奔西走するのだ

ひとは出生届とパスデーケーキによって否応なく齢をとります。若い頃は中年になるなんて想像もできなかったのに、いざなってしまうと大した違いは感じられなくて、そういえばもう中年なのだなあとびっくりしたりもします。

不惑なんていいますが、そんなものは人生が五十年だった時代のこと。惑ってばかりいる自分が中年だなんて思えないのは、未だに私が妻も子供もないせいかも知れません。あるいは、子供の成長によって自分の老いを感じられるのかしら。

前作である『SEがゆく』を読まれたかたならご存知でしょうが、勤めていたボトムスという会社が倒産してしまいました。中年になって無職というのは、少なからず悲哀のよくなものを感じます。

転職は何度かしましたが、いままではすべて自己退職だったために失業手当の支給が三ヶ月後になり、いくらなんでもそれくらいには再就職できるからとタ力をくくって職安に足を運ぶことをしませんでした。

バブルははじけてしまいましたが、まだ若かった私は「職などいくらでもある」とつそぶいて、わざわざ遠くの職安に行くよりも、いまほど薄くなっていなかった就職雑誌をコンビニで買っては、いくつかの会社に履歴書を送ったり、面接のアポをとったりして、実際、三ヶ月後くらいには就職できていたのです。

それが今回は会社が倒産したために、一ヶ月後には失業手当が支給されます。「武士は喰わねど高楊枝」の好きな見栄坊ですけど、くれるというお金を貰わないのも惜しくて、やや恥ずかしい気持ちを抑えながら、バスや電車を乗り継いで職安へと向かいました。

若い頃、私は獅子のように生きたいと考えていました。SE三十五歳定年説というのがあって、先端技術の世界で生きるにはスポーツ選手のように体力も気力も必要とこのことでしたが、その短い人生を贅沢に思うがままに生き抜いてやろうと考えていました。

残りの人生などどうでもよい。よけいなしがらみである妻や子供も持たず、いつさいの妥協をしないで贅沢に喰い散らかすように好きな仕事だけをして、年老いて生きられなくなったら餓死してしまうのもよいと考えていました。

ああ、その私が職安のお世話になるなんて。もはや獣のような生きかたは出来なくなつたのだなど、なんだかうらぶれた気分になりました。

失業手当の交付を受けるための説明を聞きました。そのときは周囲の目があったので平静を装っていましたが、内心で歯噛みをしました。もしも申請さえしていれば、支給開始前に就職できたとしても早期就職のお祝い金が貰えるのだそうです。

にやる！ なこたあ聞いてねーぞ！

その少なからぬ金額を知って切歯扼腕せつしかくわんしました。そして考えを百八十度転換させ、いままで鷹揚ようようすぎて損をしたのだ、今後は貪欲きんよくに生きてやると決意しました。

極端から極端へ。一転して銭ゲバと化した私にとって、このまま帰るにはバス代や電車賃の損と思えました。求人コーナーは求職者でごった返しており、そのなかに割り込んでいくのは浅ましい行為のように感じておりましたが、もはや吐く息さえ惜しむ餓鬼となり果て、恥も外聞もにやい！

ところが求人票を見てびっくり。SEなんて職種にはほとんど募集などないのです。

ちよつとエラーに言わせて戴くと、話の通りがいいのでSEを自称していますが、本当のところはSA（システム・アナリスト）が正しいところでしょう。ユーザーと技術者という、バックボーンも違えば、普段使っている言葉も違う同士の間にはいつて、通訳のようなことをしたり、事務担当者が漠然と抱いているイメージを具現化するのが私の仕事

です。

もちろん、最低限の技術がなければ開発するスタッフと議論が噛み合いませんが、それより重視されるのが調整能力。両者の利害をうまく調整して、無理な要求には次善の策を考えたり、ときにはゴリ押すこともあります。

職安には若い技術者の募集はありましたが、私のようにコウモリ的な、技術でもなければ事務でもない、万遍ない知識が必要とされる職種はないのです。

自分でもわかつていることに、そういう特殊な職種は私の住む埼玉では少なくて、やはり東京のような都市でなければ難しく、当たり前の話ですが、埼玉の職安には東京の募集はありませんでした。

以来、私は職安に紹介してもらうことは諦めました。もちろん、失業手当を貰うために四週間毎には通いましたが、ありもしない求人を探すのは時間の無駄とさっさと帰りました。

就職雑誌が発行される金曜日の朝になると、すわこそとばかりにコンビニに走ります。帰宅して、よい会社がないかと物色しては履歴書を書く日々。でも、四十歳という年齢の壁は厚く立ちはだかっているのです。

書類選考で落とされた会社もありました。翌週あたりにアポをとると面接の日まですることはありません。パソコンの勉強はしていましたが、鬱々として進むものではありません。

午過ぎまで寝ていて（それにしても当時は、よく目が腐らなかつたものだと思います）、することも無いものだから寝床でそのまま本を読み、ウトウトしてきてまた寝たり。

ちよつとだけパソコンの前に座ると、もう夕方です。会社にいればまだ早いのですが、なにせすることがないので晩酌にしています。

もういつそどんな会社でもいいから拾ってくれないかとステバチになりかけたこともありました。

あるときなど、先方の社長に氣にいられ、ぜひにと懇望された会社もありましたが、面接のために待つている間、社員が電話で注文をとっているところを目撃して、ギョツとして辞退しました。

だつて注文がとれるたびに社員全員が立ち上がつて、「よかったね。よかったね。よかった、よかった、よかったね。やったあ」と歌い踊るのです。

この話、絶対に誰も信じてくれないだろうなあ。

毎日が海外旅行～台湾の会社に入社

【採用通知】

その週は二社ほど面接を受けて、一社は早くも断りの通知が来てガッカリしていると、もう一社のツール・ジャパン（仮名）という会社から二次面接の通知がありました。

一次面接では自分の経歴などを話しましたが、二次面接では人事部長から待遇面などの条件を提示され、不満はないかと訊かれました。

「それと当社は台湾に親会社のある会社ですが、外資系の企業に勤めることに違和感はありませんか？」

「いいえ。前の会社は中国やインドと取引があつて、直接は話したことはありませんが、いろんな国のひとが来ていましたから」

数日後、人事部長から電話がありました。

「基本的には採用の方向で話が進んでいます。最終的に駐日大使と会っていただき、そこ

で決定します」

やったあ。やっと長かったブー生活から逃れられる。

あれ？ 待てよ……。たしか駐日大使とか言わなかったか？

うーん。台湾の政府企業かなにかかしら。

ま、なんでもいいや。ちゃんと仕事があつて、お給料を貰えれば文句はないものな。

あとで知ったことですが、駐日大使というのは私の聞き違いで、駐日代表といって、まあ、社長のようなものでした。

風習とか民族のちよつとした考えかたの違いから、いろいろな誤解を経験することになるのですが、このときが最初の体験でしたね。

【通訳がつくなんて】

出社してみると台湾人のSEに会われました。何人かの台湾人スタッフは日本に住んでいて日本語も堪能でしたが、そのSEだけは日本語があまり話せず、システムの立ち上

げのときだけ来日しているとのことでした。

一週間ほど滞在して、私に引き継いだら帰国するというので、さっそくのミーティングが始まりました。

テフさん（仮名）といって、その後、私の上司になる部長が通訳としてつきました。なんだか国際会議に出席するVIPにでもなったみたいでカッコいいなあ。

話は変わりますが、台湾人のSEはジョン（もちろん仮名）といって、彼も同じテフという名前なので、ニックネームで呼ばれているとのことでした。台湾では大学を卒業すると、教授が名付け親になってニックネームを決めるとのことでしたが、ジョンさん以外にはニックネームで呼ばれているひとは見たことがなく、本当かどうか、いまだによくわかりません。

他の社員は、

「ヘイ！ ジョーン！」

なんて呼んでいましたが、本名ならともかく、同じアジア系の顔をしている相手に西洋人みたいな呼びかけは面映ゆく、なんとなく収まりが悪いなどは感じながらも、「ジョンさん」と、さんづけで呼びました。

閑話休題。ジョンさんからAS/OSというオフコンの知識について、どれだけ私が知っているかを質問されました。それに答えると、なにせ通訳なんかを介して話したことはありませんし、ややアガってもいましたので、テフさんから言われてしまいました。

「そんなにいつべんに話されたら通訳が出来ません」
そりゃそうだ。

反対に、こんなこともありました。すでにシステムは台湾で作ったものを日本語化してあったので、設計書はないのかと質問したところ、何故かはぐらかされてしまいました。さらにしつこく追求したら、テフさんとジョンさんとでいきなりの鳩首会議。

よくわからない中国語でのやりとりには、ぼうつとながめていました。

しばらくしてテフさんが一言。

「ありません」

ひょえ？ だったらいまの長い話し合いはなんだったの？

【素晴らしい待遇】

自分の机としてあてがわれたのは、一般のフロアとマシン室の二つでした。どちらも部長が役員が使うくらいの大きさで、これが電算だけの好待遇かというと、他のひとも同じくらいの机なので、さすが外資系は違うなあと妙なことに感じしました。

マシン室なんか、五、六坪もある部屋に、ぼつんと私の机とAS/OSがあるだけです。かつて不動産屋というスペース効率にうるさかった会社にいた身には、とてつもない贅沢のような、空恐ろしささえ覚えました。

パソコンも一人一台があつて、以前の会社ではワープロの奪いあいをしたこともあり、ようやく電算部員だけの特権として一人一台のパソコンを認めさせたくらいなので、さすが外資系は違うなあ。

いい会社にはいったものだ。

ただ、妙なところでケチなところもありました。AS/OSにもログイン用のIDというのがあつて、普通、電算部員にはセキュリティ・オフィサーの権限（セキュリティを管理する権限。早い話が万能な権限）をくれるものですが、私がもらったのはプログラマ・レベ

ルの権限。

ということば、ややこしいことはしないでいいのねと勝手に自己解釈。以来、サボりにサボるのですが、この体質は随所にあつて、普通、中途採用というのは即戦力を求めるものなのに、教えてないことしか出来ないのは当然、指示された通りのこと以上に、自分の頭で考えて仕事をしなくてもよいというスタンスなのでした。

ラクでいゝや。

その日、初出社ということもあつて定時で帰りました。ジョンさんが離席していたので、読めるかな？ と一抹の不安を覚えながらもメモを残して。

翌朝、なにか言われるかなとも思いましたが、

「あれくらい日本語ならわかりますよ」

にこやかな笑顔で言われました。

初出社とはいえ、メモのみで黙って帰ってしまったのに……。

ラクでいゝや。

【ああ、勘違い】

ちょっとした風習の違いで誤解するのはよくあることです。とはいえ、だから海外旅行などが愉しいのであり、外国人と一緒に仕事をするのは毎日が海外旅行のようなもので、そのたびに新鮮な驚きを味わえます。

あるときウーさんという台湾人とジョンさんとお午を一緒にしました。喫茶店にはいつて話すうち、水がなくなつたのでポットから注いだあと、ウーさんのコップも空だったので注いであげようと思いました。

するとウーさん、人差し指でテーブルをコツコツと叩くではありませんか。普通、これは、おらおら、早くせよ、トロトロしてんじゃねぞ。

そういう意味にしかとれませんから、かなりムツとして、だけど新入社員がいきなりケンを売るのもためらわれたので、その場は黙っていました。

ところがこれ、まったくの誤解だったので。人差し指は人間の頭を表現して、親指と中指が両手で、つまり臣下が皇帝にぬかづいているところで、どうもありがとこの意味なのだそうです。

短気を起こさなくてよかったあ。

誤解といえは初出社の日、お午を何人かで一緒に食べました。そのときあるひとに、

「あなたは台湾人か？」

と訊かれました。

私の本名は日本人によくある名前ですし、口下手なのでモタモタとしゃべるキライはあるにせよ、発音も普通だと思います。どうしてそのひとがそう思ったのか、いまだに不思議でなりません。

こういうことに神経質な性格のひとつだと勤まらないでしょうが、ま、いつかでズボラを決め込む私にとって、なかなか快適な職場なのでした。

【ちょっと一言伝】

うちの会社は健康食品を扱っています。なかでも霊芝が主力商品となっています。ご存知のなかたのために説明すると、サルノコシカケ科のマノネンタケという学名のキノコ

のことです。

入社してすぐの頃、福利厚生の一環として総務から霊芝を貰いました。茶色の錠剤になったそれは霊芝の有効成分のエッセンスだとのことですが、色だけ見るとブキミな感じを受けました。

とはいえ、いやしくも自社製品を知らないのは恥ずかしいことなので、せっかくくれたものだから食べてみようと思いました。いくらなんでも厚生省（当時）が認可したもので、日本健康・栄養食品協会の認定まであるものが身体に悪いなんてことはないと思ったからです。

もちろん、私はいたって健康体の上、くれたのも一日あたり二粒だけだから大した反応はありませんでした。しかし、しばらく飲み続けるうちに血行がよくなったのか、身体が痒くなりました。

漢方には未病という言葉があって、まだ病気にはなっていないけど、少なくとも健康ではないことを言います。その状態のうちに発見して治療してくれる医者が上医で、病気になってから治すのが中医なのだそうです。

まあ、いくら健康体といっても現代人。まして私は大酒も呑むし煙草も喫うしで、未病

であることは間違いありません。一日中、パソコンの前に座ったままなので肩凝りにも悩まされていました。

ある日、気がつくとう肩凝りがなくなっていました。同僚に話すと、どろどろに汚れた血液がさらさらになったからだとのこと。

靈芝入りの歯磨きが新発売になり、社員にもプレゼントされました。いくら靈芝がよいといったって、虫歯まで治るはずがないじゃないかと苦笑しながら、通常の歯磨きと同じくらいの効果はあるだろうと母にあげました。

数日後、帰宅したときに母が興奮して話すには、いままで悩まされていた歯槽膿漏が一回の歯磨きで治り、医者もびっくりしたとのこと。

な、バカなと思いました。母が息子に嘘をついても得などありませんから信じるしかないでしょう。

私も企業戦士の一人として、自社製品の優秀性は疑いせんけど、これほどは思っています。

信じようと信じまいと読者の自由ですが、真実はひとつです。

【方向オンチ】

台湾の漢字は繁体字といって、日本の旧字と同じようなものです。ちなみに大陸のは簡体字。

いまはマイクロソフトが繁体字も簡体字も提供していますし、IMEまで用意されていますが、その頃はあったとしても知りませんでした。

そういうソフトが売っているというので、デモをジョンさんと見に行きました。

応対に出てきたのも華系のひとで、中国語なんかチンプンカンプンな私は、ジョンさんに説明しているのをふんふんと聞いているふりをしながらパソコンの画面をながめているのみで、なにがなんだかわからんちゃん状態。

もっとも、後日、台湾に帰ったジョンさんとメールのやりとりをするために、ちょっとは勉強しましたよ。第一、本好きの私は旧字くらいは読めますから、中国語を書くことは出来なくても、漢字の羅列をじつと睨んでいるとなんとなく意味するところはわかります。

さらに話は脱線して、五年近くも中国語を聞いていると、日常で聞こえる言葉くらいは

憶えるものです。

「**尔**好（ニーハオ）、再見（ツァイツェン）」くらいは以前から知っていましたが、こんな言葉も憶えました。

「是（スー）はい」

「對對（トイトイ）こそ」

「沒有（メイヨー）ちゃう」

大抵のお客は日本語が出来ますが、たまに中国語しか話せないひとから電話があつて、日本人スタッフしかいないときは困ります。健康食品の会社のせいかな、年配のかたが多いために、日本人同様、英語がわからないひとも多いのです。

「ツール・ジャパンでございます」

「テフさん、なんとかかんとかあ」

「げっ！ 中国語だ。」

「テフさん、プーツァイ（不在）。ウオメン（我們）、リユーベンレン（日本人）。テンファー（電話）、リンチョーリン（〇九〇）……」

少しく意味を補足しますと、テフさんはいない。私たちは日本人（だから中国語はわか

らない、と察して。お願い。電話（番号を教えるからかけて）。

大抵はこれだけで、

「ノー・ヒア？」

「ノー・ヒア！ ノー・ヒア！」

大汗をかいて電話を切ったあとは、なんとか相手に通じた達成感と、なにより外国のひとと会話ができたという優越感で鼻が五ミリほど高くなります。

話を戻して。ジョンさんと出かけたあと、用事が済んだときには夕方になっていました。

このまま直帰してもいいだろうということになって、

「ビール？（一杯やらない？）」

「オーケー。グッド！」

会社のある渋谷に戻って適当なお店を探しました。新宿だったら知っているけれど、ほんのちよつと離れた渋谷はまったく不案内。しばらくは黙ってついてきたジョンさんも焦れたのか、

「私、お店、知ってます」

日本人のくせに、台湾人のそれも日本在住ではないひとに道案内されてしまったのは私

くらいではないでしょうか。

【やることがない】

一応の引き継ぎも終わり、ジョンさんは台湾に帰っていきました。引き継ぎといたって、大半のオペレーションは一般社員が行いますから、私がやるのは月末処理くらい。

やることがないのでインターネットをながめる毎日。

ふわぁあ、退屈だね。

設計書がないということなので、せめてI・O設計(*1)とDB設計(*2)くらいはシステムから書き起こそうとしました。

普通、設計書の自動発行ツールくらいはあるものですが、そういった類いはいつさいありません。

DB設計書を発行するツールは前の会社でパクってありましたが、繁体字のフォントそ

のままなので、日本語環境では文字化けして読めません。もちろん、定義のソースはありますから、テキスト部分を書き替えてジェネレーションし直せばいいのですが、すべてのデータベースをそうするのは徹夜の作業になります。

とりあえずI・O設計書だけでも作るかと思いました。システムを調査するうちに、画面はハードコピーで行けそうでしたが、試しに帳票を発行してしまうと、同時にデータの更新も行ってしまうプログラムがちらりほらり。

うーん。まだよくわかってないうちにへんなことをしてしまつては……。

テスト環境を作るうかとも考えましたが、どうやらこのシステム、汎用機のSEが設計したみたいで、基本思想が汎用機の作りかたになっていて、極端に資源を節約する設計になっています。

これではテスト環境も作れない。

やむなく設計書作りは断念して、たまにエクセルやワードのオペ指導をするくらいで、またしてもインターネットをながめる日々に戻りました。

そうするうちに、VB（ビジュアル・ベーシック）やウェブサイトの作成メーリングリストの存在を知ったり、ニフティにも勉強用のフォーラムがあることがわかり、いきおい、

それらに参加してROM（発言をしない読むだけ君）による勉強が始まるのでした。

（＊１）画面と帳票の設計書

（＊２）データベース設計書

【新入社員はお気楽、極楽】

もともと電算部門がなかったような会社ですから、たいていのことは他の社員が自分で行っています。トラブルが起きても自分たちで解決してしまうので、なにも無理をして仕事を作ることもあるまいと静観していました。

あるときパソコンが故障したというので、私はあまつていたジョンさん用を使うことにして、自分のパソコンをCE（Customer Engineerの略で、早い話が修理屋さん）が来るまでの代替としました。エッホエッホと運んでいると、総務の女子社員が来て、パソコンは総務管轄だから勝手に移動しては困るとのたまいます。

へ～。どうぞお好きに。

電算部門がないうちはそうかも知れませんが、出来たら移管するのが普通ではないの？
いくら最初にそう指示されたからって、もうちょっと柔軟な発想は出来ないものですか
ねえ。

フェミニストの私としては、だったらあんたが運べば？ などと女性に重労働をさせるには忍びなく、相手もそれはイヤみたいなので、移動したことを連絡するということになりました。

だけどシリアル番号の管理もしていないで、一体全体、なにをどう管理しているのかしら。

またあるときは、これもまた総務の女子社員でしたが、エクセルの表に数字を打ち込んでいる様子なのに、何故だか電卓を叩いては入力していました。

普通、エクセルというのは計算をしてくれるから便利なのであって、ワードじゃあるまいし、電卓を片手に操作しているひとは初めて見ましたね。

これではあんまりだと思って、どんな表を作っているのか見せてもらって、ちょっとした計算式を組み込んであげたら、それだけで感謝されました。

なにせ上司というものがいなくて、唯一、それらしいのがジョンさんですが、いまは台

湾に戻っていません。なにも指示はなくて、こちらから率先してやってあげようにもそのような体たらくでした。

そのうちには仕事も来るだろうと、お気楽な新入社員生活をエンジョイしようと、パソコンと医薬についての勉強の日々が続くのでした。

【社内メール】

『SEがゆく』に出てくるボトムスという会社では五百万円くらいをかけてLANを構築しました。

サーバーにネットワークを搭載して、社長室に日報を配信したりとかしていたのですが、これが何故かトラブル続きでした。あるときなどはデータが壊れてしまったので、以来自分のパソコンにバックアップをとるという始末でした。

いまとなればもっと安くLANを構築できる自信がきましたが、新しい会社に入社した当時、まだまだLANのことなど何もわかっていませんでした。

ネットワークOSなどなくて、ピア・ツー・ピアの接続でしたが、それでもアウトLOOKを使えば社内メールのシステムが構築できそうです。だって広いオフィスに社員がぼとりぼりという状態でしたから、内線電話はあるものの、離席しているときにメモを置きに歩いていくのがオツクウです。

パソコンなら二台ありますから、それでテストを繰り返すうち、ようやく使い方がわかってきました。自分のパソコンをポスト・オフィサ（サーバーのようなもの）にしてジョンさんのパソコンにメールを送ってみたら、ちゃんと受け取れました。

問題はここからです。技術的なことをクリアするのは、いくら慣れないパソコンといえども、これでも一応はSEです。それより難しいのは、いかにして社内に浸透させるかです。

最近減りましたが、当時は外字登録を頻繁に頼まれていました。たとえば「尔」など、日本にはない漢字がいくつかあって、中国語にはカタカナも平仮名もありませんから、別な単語を使うことで解決していましたが、それにも限界があります。

新しいもの好きな女子社員に目をつけると同時に、そのひとはよく外字登録を頼まれているので、

「今後、外字の連絡はメールでしない？」

それまでは私が作って、そのファイルをフロッピーで持って行ってインストールしてあげていたのですが、それだと作業中は机を占領してしまうことになりました。LANを経由してファイルを送り、都合のいい時間に自分でインストールしてもらって、完成の連絡はメールでしようというものでした。

もともと自分で出来ることは自分でしたいという性格のひとつでしたから、まして新しいことが大好きなので、いちにもなく了解。

私に外字登録を依頼するには社内メールが必要という構図が出来上がり、しかも内線電話だと無駄話をしているのが上司にバレますが、メールだとその心配もいりません。いきよに浸透しました。

たまにチェックしてみると、「今日、お午どうする？」なんてメールもありましたが、まあ、これくらいはご愛嬌でしょうね。

もちろん、あまりにひどい私用メールが飛び交っては、それがバレたときに推進者の私が叱られてしまいますから、ちょっとクギをさすことは忘れませんでしたけど。

「私のパソコンを経由するのだから、メールの中身は見えるからね。デバカメ趣味はない

けど、保守のときに見えてしまうこともあるから、デートのときに彼がどうしたとか、プライベートな話は控えたほうがいいよ」
まったくのウソなのですが。

【プロバイダ選び】

いまは理由を忘れてしまいました。以前から利用していたプロバイダから別なプロバイダに変更することになりました。その当時、新興のプロバイダでセキュリティ上の問題が発覚して、そこも似たようなものという判断があったのかも知れません。

もともとブランド志向の強い私は（服装においては逆ですが）、ある有名なプロバイダにすることにしました。そのことを上司に報告するとともに、どうして元のプロバイダに決めたのか経緯を訊いておきたくなりました。するとそのひといわく、

「同じビルにはいつているから」

ひょえ？ 意味わからないんですけど……。

これは私の想像ですが、近ければサポートも楽だろう、なんていうことではまったくなく、いったんNTTを経由してプロバイダのアクセスポイントにつながるということを知らなかったのではないだろうか。
意外と当たっていたりして（笑）。

【日本人的発音】

日本人が外国の文化を取り入れて日本流にアレンジしてしまうというのは、よくいわれること。わかりやすい例だと食べ物で、コロッケだのカレーライスなどはもう完全に日本食となっています。

コンピュータは本家がアメリカだから用語についても米語だったはずが、日本式な発音になってしまい、しかも何故か関西風な発音をするひが多く、コボルなどは「ル」にアクセントを置くようです。

あるとき台湾から来日したひとに質問を受けたことがあります。そのひとは日本語をしゃ

べれるのですが、

「あなたのパソコンにはワールドがあるか？」

ひょえ？ ワールド？ なんのことだろう。

わけがわからずに立ちすくんでいると、業を煮やしたのか、私のパソコンを操作して、
「あるじゃないか」

見てみるとワードのことでした。

本当のところはワールド（外国語の発音をカタカナで書くのは難しいものがあります）とも言ったのですが、そのとき私の耳にはワールドと聞こえたのでした。

生粋のアメリカ人の発音はわかりませんが、少なくとも日本人みたいに「ワ・ア・ド」と発音するのは正しくないでしょうね。

でも、アメリカ人っぽい発音で話すのって、なんかテレくさくありません？

【使い古したジョーク】

好きなジョークはいくつかありますが、何度も使うのは興醒めなものです。とはいえ、せっかく新しい会社にはいったのだから披露しない手はありません。

フロップの磁性体のところを透かして見せて、「ほらほら、ここに文字が書いてあるだろう?」なんていうのに、何故かひっかかるひとが多いこと。SEの私が言っからかしら。

もっと好きなのが手相占いでひっかけることです。

「手相というのは手のひらを観ることだけど、手の甲を観る手相もあるって知ってる?」

「いいえ」

「なに、知らない。では観てあげよう。ちょっとここに手を乗せて」

差し出した手に乗せたとたんに、

「お手!」

一瞬、なんのことかわからず、きょとんとしているひとがほとんどです。

こういうのを酒席などでやると面白いのですが、なにせ健康食品を売っている会社。宴会といえどもジュースで乾杯というのが常識なのだそうですが、当時のトップがキラいで

はないひとで、歓迎会ではちゃんとした酒宴になりました。

どうやら台湾式の宴会では手酌という概念はないみたいで、しきりに注ぎあつては乾杯を繰り返します。なみなみと注がれたビールを一口飲んで注ぎあうので、いつそれがこぼれないかと余計な心配までしてしまいます。

些末なことでは違いはあるものの、人間なんてみな同じ。宴、たけなわともなれば、そこそこで談笑する声もあれば、うら若い女性の嬌声も聞こえてきます。

ある女性がしなだれかかってきてお酌をしてくれようとすれば、私だって男です。うれしくないわけではないけれど、

「さあ、どうぞ」

で、どぼどぼどぼ。

げっ。こぼれた。

「静かなのねえ」

と言われましたが、なぐに、まだ新入社員だから猫をかぶっていただけのこと。

【指きりげんまん】

■代理店なんてこんなもの

オフコンには代理店というものがあって、ユーザーのフォローから購入までのコンピュータに関わる一切を行います。ちょっとした電話サポートくらいは無償でしてくれますから、便利といえば便利なシステムです。

営業はもとより、SEまで専任者がつきますので、こちらの機器構成も少しくらいは知っているのと、技量もわかってくるので、くだくだしい説明もなくてすみます。

ただ、パソコンを買い足すなどのとき、そこらのパソコンショップで買えば安いのに、代理店を通すので高いものになってしまいます。まあ、通さなくても法的な拘束力はありませんけど、あまりいい顔はしませんね。

企業向けと個人用とであまりに価格差があるので理由を訊いたところ、製造過程におけるテストの回数が違うそうです。でも、最近は企業向けも安くなってきましたので本当かなあ。

入社する前から導入されていたAS/400ですから、当然のことに代理店がついていました。

でもここ、あまり対応はよくありませんでした。

約束通りの時間には来ない、頼んだことは忘れるなどくらいなら、程度の差こそあれ、このメーカーの代理店でも似たようなものです。あるとき遅刻した富士通の営業マンにイヤミを言ったことがあります。

「あんたのところは殿様商売だなあ」

「でしょ？ 富士通時間って有名なんです。あつはっは」

平然とのたまっていました。

いつも附記することですが、これは富士通に限りません。たまたま例として挙げましたが、それだけ富士通とのつきあいが多かったというだけのことです。

あるときAS/400が立ち上がらなくなってしまいました。お客が来たときに伝票が発行できなくては困りますので、アセッテ代理店に電話をしました。

「もしもし。うちの担当SEはいます？」

「ただいま出張しておりますが」

「困ったなあ」

「どういったご用件でしょうか」

「ASが立ち上がらないのですよ」

「少々、お待ち下さい」

誰かと相談している声が聞こえてきます。

「たまに時間がかかることがありますので、しばらく様子を見て下さい」

「どれくらい？」

またしばらく相談する声が聞こえてきて、

「二、三時間くらいお待ち願えますか？」

「そんなに待てないよ。お客はもつじき来るかも知れないんだよ」

「では相談して、またこちらから連絡します」

イライラしましたねえ。店頭販売は少なくて、どちらかというと電話注文が多いため、その日はたまたまお客が来なかったからよかったようなものでそれでもさすがに午後になっても連絡がないのには腹が立ちました。

「もしも」し。まだ連絡がないけど、どうなってるの？」

「あ、すみません。いま電話しようとしていたところで」

蕎麦屋の出前じゃねーんだぞ。

「リセットして再立ち上げてみて下さい」

「どうやるの？」

「調べて折り返しお電話します」

しかし、待てど暮らせど電話はなし。

「もしも」し。まだわからないの？」

「あ、すみません。いま電話しようとしていたところで」

さすがにここでキレました。

んなるー！ ナメとんのか！

紆余曲折の果てになんとか立ち上がりましたが、客が来たらぐうぐうと泣いてしまったり、立腹と苛立ちを総動員したせいでヘトヘトに疲れました。

■まずは始末書

いままでガマンをしてきた代理店でしたが、さすがに堪忍袋の緒が切れました。本当は可哀想だからしくはなかったのですが、それまでの担当営業の対応も含めて、これはもう仕方がないと判断しました。

とはいえ、いきなり切るのは大義名分が希薄ですから、まずは物証を集めて、いざというときに相手に有無を言わせないように外堀を埋めていかなければなりません。

入社してすぐの頃、挨拶をしたことのある営業部長に電話をして、とにかく来なさいと言いました。

「今回はご迷惑をかけたみたいで」

「本当だよ」

「……」

「たかがリセットだけのことなら、なんですぐわからなかったの？」

「たまたま不慣れな人間しかいなかったもので」

「だったら電話で、わかる人間に連絡をとればいいじゃないか！」

「はしつとテーブルを叩きました。」

「ひえ」

「どだい、いつペンも連絡がないというのはどついうこと？　すべてこちらから電話をしているんだよ」

「どうもすみません」

「わかった。じゃあ、もういいよ。代理店を変えるから」

「そこをなんとか」

「ふん。それなら二つだけ条件があります。担当営業を変えることと、始末書を持ってきたさい」

「始末書ですか？」

「つたりめく。それくらいですませてくれたと感謝して欲しいくらいだい！　私あ、いままで何度も代理店を変えてきたのだから、それくらいはどつてことないんだからね！」

「ですが始末書というのは」

「ほく。うちみたいなちっぽけな会社には、おたくみたいな大会社は始末書なんか書けないっていの？」

「いえいえ。決してそのようなことは」

「だったら持ってきたさい！」

■幼稚園児のお約束

かくして新しい担当営業が部長に連れられて挨拶に来ました。そのとき私はこう言いました。

「部長さんからどう聞いているか知らないけど、担当を変えさせたおっかない人間と思っていない？」

「いえいえ」

汗を拭きながら答えました。

「それだけのことがあったということで、本当の私はとてもやさしい人間です」

「はいはい」

「だからあなたにも前もって教えておきます。これから言う三つの約束だけ守ってくれば私は怒りません」

「なんでしよう」

「遅刻はしないこと。嘘をつかないこと。報告はこまめに」

「わかりました」

「電車のトラブル、道が渋滞するなど遅刻することあるでしょう。でもあなた、携帯は

持っている？」

「持っています」

「だったら電話の一本くらいは出来るよね。もしも携帯を忘れても、とんでもない山奥ならともかく、都内なんだから公衆電話くらい、そこらじゅうにあるものね。それともおたくの会社は電話代の十円も惜しめと教育している？」

「そんな、まさか」

「遅刻するときもあるでしょう。でも、必ずそのときは連絡をして下さい。何故ならば、あなたが来る時間になったら、私はややこしい仕事を中断されるのがイヤなので、なるべく簡単なことをしながら待機しているのです。その大切な時間をあなたは私から奪うことになるのです。わかります？」

「はい」

「それと、なにかのアクシデントで約束が守れないときもあるでしょう。うつかりオーケーしてしまっ、あとで出来ないことがわかったということもあります。でも、そのときには嘘をついたりしてゴマカさないで、正直に言っして下さい。そして迅速に報告して下さい。何故ならば、そのとき私は問題に対処しなければいけないわけです」

「そうですね」

「場合によっては上司を説得しなければいけないときもあるでしょうが、しっかりと代理店を掌握して報告すれば上司も安心して任せてくれるけど、担当の私がわけわからん状態では上司も不安でしょう」

「わかりました」

「では約束ね。これを守らなかったら、そのときはすっぱりと代理店契約を切りますからね」

いくらなんでも指きりまではしませんでした（笑）。

この約束、結局は守られなくて、その代理店とはお別れしました。

さよ～なら～。

【二重人格】

プライベートの私をよく知るひとは、前回の話を読むと首を傾げるかも知れません。普

段の私は気が弱そうで、口数も少なく、酒席では独りでチビチビと飲んでいるからです。

自分でも不思議に思うのですが、どうして会社の仕事となるとシャモのようにいきり立つのだろう。お家大事のサラリーマン根性なのかな？

たとえばこういうこともありました。ある印刷屋を総務に紹介して、たしかに安いので発注することが決まりました。ところが数日後、総務の女性から泣きつかれました。

「対応が悪ければ相談に乗ってくれるというので話しますけど、あんまりひどいんです」

「どうしたの？」

「見積もりを貰ったのですが、うちのは特殊なサイズの用紙なのに、標準のサイズで見積もってしまったと言っています」

「ふ～ん」

「改めて持ってきた見積もりというのが、とんでもなく高いので文句を言ったけど、とりあつてくれません」

「よし、わかった。私に任せて」

さっそく電話をしました。

「もしも～し。総務から聞いたけど、どういこと？」

「いやあ、それがですねえ」

滔々^{とうとう}と言いつくするので黙って聞いていました。ケンカの常道として、まずは相手に言いたいことを言わせて、そのひとつひとつに反論して、グウの音も出ないくらいに叩きのめすために。

頃合いをみて、最初は穏やかに訊き返しました。

「だから？」

「はい？」

「だからあんたっつーの！」

周囲の人間がびつくりするくらいの大声で怒鳴りました。

「さっきから黙って聞いていれば、あんたのは言い訳ばかりじゃないか！」

「いえ、その」

「いいか？ あんたのミスのせいで総務の女性は部長に報告しなければいけないのだけど、部長はどう考える？ あんたのことを知らない部長は、担当の女子社員にも発注先の管理ミスがあると判断するかも知れないんだぞ」

「あの、でも」

「仮に口には出さなくても、内心ではそう思って、減点の対象になったとしたら、あんたは責任がとれるのか？」

「そのときは私も謝りに行きますから」

「ほーう。じゃあ仮に、今度のボーナス査定が悪くて、いつもより少なかったら請求に行くから、その分を補填してくれるんだな？」

「そんな大げさな」

「大げさじゃない！」

「すみません」

「それくらいこっちは真剣に仕事をしてんだよ！ 遊びじゃねーんだから、そっちも真剣に仕事をしてくれよな」

「ですが総務のかたと話したときは、そんな話は」

「また言い訳か！ 言い訳はいいわけ！ だったらなんで、そのこは今、ここで泣いているんだよ。部長に叱られると泣いているんだぞ（ウソです）」

「……」

「おうおう。誠意を見せろよ、誠意をよお（ほとんどヤクザですね）」

「誠意といいますと？」

「知らねーよ、そんなことめ。自分で考えるよ、自分で」

「ははっ」

「いいか。必ず今日中にどついたら誠意を示せるか、じ・ぶ・んで考えて、総務に電話しなさい！ ガチャーン！」

相手の耳に強烈な一発をお見舞いするために、わざと受話器を叩きつけました。

その日の夕方、総務の女子社員と廊下ですれ違ったら、

「あ、よーみさん。あれから印刷屋から電話がありましたよ」

「で、どうだった？」

「今回は最初の見積もり通りの金額でいって」

「よかったね」

につこり笑って答えたのは、ケンカをしても本気で怒ったら負けだからです。頭はクールに、ハートは熱くがケンカの常道だから感情をかき立てただけのことで、電話を切った瞬間には冷静になっていました。

【多重人格】

二重人格からの連想です（笑）。

学生の頃、後輩から相談されたことがあります。

「せ、先輩。実はぼく、二重人格なんです」

「だっはっは。なんだ、たった二つしかないの？」

人間だったら単一な性格のほうが珍しいのではないのでしょうか。いろんな人格が複雑に混ざって私という人格を構成していると思うのですが。

以前、多重人格を扱う本があつて、どうしても買わずにいらなくて手にとってしまったが、いまになつてもまだ読んでいません。ヒトラーの『わが闘争』も同じで、抗しがたい魅力によつて買つてはみたものの、読んだら絶対に影響されるとわかつているからです。

そういう点では芥川も同じで、まだ自殺したくない私は読んだことがありません。ある西洋のひとがパーティの席でにこやかに笑って握手をしながら言ったとか。